

わかめ SOUP

創刊号

パタゴニアの助成先に決定！

やたっ！ついにやりました。みんな喜べ～！パタゴニア仙台店が行った「Voice Your Choice」プログラムの助成先にわかめの会が選ばれたのです。こいつは快挙だ、今日はわかめご飯でお祝いだよ、おっかさん！夜なべして申請書を書いた甲斐があったってもんだ（感涙

アウトドアウェアメーカーとして知られるパタゴニア社では、環境助成金プログラムを通して草の根の環境グループを支援する活動を行っています。その他、環境に配慮した製品作りはもちろんのこと、環境団体への社員のインターンシッププログラムがあるなど、環境意識の高さはハンパではありません！そのような企業から助成金をいただくのだから、わかめの会としても恐悦至極、ベリーハッピーなのです。



助成プログラムの一次審査を通った後の8月24日には、同じく審査を通った三陸の海を放射能から守る岩手の会とともに、パタゴニアの店頭で活動アピールをさせていただき、目の前を通るお客様をとっ捕まえて(?)はチラシを配らせていただきました。

今回の助成プログラムには「6ラブサミット」という企画で申請しており、助成金はこの企画に有効に活用させていただきます。

6ラブサミットは着々と計画が進行中。2月7、8日に開催、日本の未来を変える2日間です。詳細はしばしお待ちあれ！（ふだ）

もくじ

パタゴニアの助成先に決定！	…… 1
イベントレポート	…… 2
現地レポート（六ヶ所・大間）	…… 4
わかめの会・シュミの劇場	…… 5
六ヶ所再処理工場の今	…… 6

■ イベントレポート

PEACE LAND A GO GO! / SUMMER PARADISE (8.23-24@八戸市プレイピア白浜
主催：PEACE LAND a Go Go!)

8月23、24日は青森県八戸市のプレイピア白浜で、SUMMER PARADISEというイベントが行われた。ところが、8月というのに、寒い！ダウンジャケットを着ている参加者も多数。

このプレイピア白浜は海岸に接しているレジャー施設で、ちょうどステージの真後ろがビーチとなっていて眺めは最高。むかって後ろ側は緩やかな丘になっていてキャンプや散歩にも最適な絶好の場所。なんといっても会場に入る踏み切りが手動というところが、粋を感じさせる。

この企画はローカルに郷土のよさを発信し、青森に誇りを持って企業や助成金に頼らない生き方と自立の道を探っていこうというコンセプトで開かれた。そのため、ライブ、ブース（地元のお店が出展）、スケボーバンクなどをセッティングしながらも、内容は青森のよさをメッセージとして伝え、しかも会場そのものが肌でよさを感じさせるという練りに練った企画。

参加アーティストもすばらしい。サヨコオトナラ、FLY☆81、熊谷もん、KAYA、RaBi Rabi+Piko、龍伝、Free Sound Orchestra、キャラメルマン、Aloma Graff、N'Goma、Mat Arrow T8 Shock、Nort Hempire、反核警察、GROOBLE、Reveral、日本の風、ヴァキューム、en's、NONら多数。

参加して感じたことは、準備から企画まで主催者自身が楽しんでいるということと、地元のお店が企画に賛同して出展し、一緒に支えていること。そして、参加者がライブを楽しみながらメッセージに耳を傾けていることだ。ステージ、スケボーバンクの設置も手作りで、これだけの企画を作り上げる熱意と情熱は只者ではない。二日目は雨だったため屋内となったが、その分熱気が充満し、

気分も高揚していく。

この企画は有形無形の形で、アーティストも参加者も青森のよさを実感していただろうし、何より心に深く刻まれることができただろう。主催者から、来年もまたやろう！という声が締めくくりで聞かれたのはごく自然な気持ち。

この企画の原点にある、地元のよさを発信するということは、日本中どこにもある地域のよさを見つめ直し、自立した生き方の発見を示唆しているのではないだろうか。(T.H)

第2回 原子力に関するオープンフォーラム-「高レベル放射性廃棄物」に関する専門家と専門家の対話 (8.30@東北大学川内北キャンパス・マルチメディアホール 主催：東北大学未来科学技術共同研究センター 組織マネジメントプロジェクト他)



8月30日、東北大学を会場に開かれた第2回原子力に関するオープンフォーラムに参加した。原子力推進派の専門家朽山修氏と反対派の専門家小出裕章氏の「高レベル放射性廃棄物」に関する対話後、市民の質疑応答。

専門家の対話で、持続可能な社会を作ることが必要との方向では一致しているというが、具体論での接点は見つからない。朽山氏は、「中国などの経済成長とともにエネルギー消費も右肩上がりである。難着陸している時に原子力はやめられない。廃棄物地層処分も高速増殖炉も技術的には確立している。できないのは他の要素もあるからだ」という。かたや小出氏は、前回も今回も原子力はいらないと主張する。「高速増殖炉は、5年

経つと10年先延ばしになっている。危険性も計り知れない。エネルギーは、工業国が世界エネルギーの1/4を消費している。エネルギーがなく寿命を終えてしまう国の人々もいる。生きるための必要エネルギーは、ひとり一日5万Kcalあれば足る。日本では70年代くらいにあたる。工業国のエネルギーを世界へ分配していくことが大切だ」という。人間観や社会哲学の違いからか、未来社会のエネルギーへの考え方は沿うところがないように思った。

そろそろ自己中心的で近視眼な発想は終えて、地球生命体が普通に寿命を全うできるようなエネルギー分配の仕組みを皆で考えないと・・・と思いました。(ともこ)

「活断層見逃しの現場をみるー真下に活断層！六ヶ所村再処理工場の耐震安全を問うー」(8.31 @石巻文化センター 主催：実行委)

『六ヶ所再処理工場直下に活断層か』再処理工場の稼働に反対する人にとって、5月25日の朝刊は衝撃的でした。しかし、日本原燃はその指摘を無視するかのようについで運転を続け、再処理工場直下に活断層がある可能性を発表した渡辺教授達のことを『市民をいたずらに不安に陥れる』と非難しました。専門家の意見を真摯にとらえるべき事業者がこの態度では、私達市民が安全・安心な生活を送ることは絶対にできません。

このまま渡辺教授の発表を無視されては困ると感じ、私達は実行委員会を結成し講演会を企画しました。当日は100名を越す参加者があり、多くのマスコミも取材に来ました。女川町の町議会議員にも多く参加していただき、この問題の重要性を再認識しました。講演を聞いて感じたのは、日本原燃は渡辺教授の見解を理論的に否定できないなら再調査をすべきであるということ。口だけの安全・安心にはもう騙されません。(NPO地球とともに 武藤北斗)

WE LOVE SANRIKU 交流会～天恵の海・三陸に親しもう～(9.6-7@岩手県山田町、大槌町 主催：親潮ネットワーク)

わかめの会の正式名称は『三陸・宮城の海を放射能から守る仙台の会』。でも・・・はたして、その三陸を知ってるのだろうか？そして岩手の方からも「ぜひ！三陸の海を知って欲しい」そんな思いからこの企画が生まれた。

9月6～7日の二日間、おもいっきり三陸の海を堪能できた。岩手、宮城、それぞれ、自分の地で動いてきた、そして動いて行きたい、そう思う人たちが一堂に会し、これからどうやったら再処理工場を止めることができるのか。。意見を交わし合った。初めて会う方、何度もお会いしていても深く話をしたことがない方とも、食を共にし、酒を酌み交わし、語り合う事ってなんて素敵なんだろう！を実感。

そして・・・なにより、三陸の海の素晴らしさ！！巨大ホタテ、牡蠣、ムール貝、秋刀魚、海の幸を満面の笑みで食べる。こんなに美味しい恵みを与えてくれる三陸の海。翌日には、サーフィン、カヤック、釣りと、海に遊んでもらった。この雄大な自然に抱かれながら「この素晴らしい海を絶対に残していきたい。放射能なんかで汚されたくない」誰もがここに深く刻んだことだったと思う。

さあ！仲間と海からたくさんエネルギーをもらって、来年の六ラブサミットへ向けてのスタートだ！（れいまま）



■ 現地レポート（六ヶ所・大間）

〈六ヶ所から①〉

今年の4～7月に六ヶ所村の「花とハーブの里」で住込みスタッフをしました。代表の菊川慶子さんは16年前に故郷の六ヶ所村に戻り、「核燃に頼らない村作り」を目指して地場産業づくりに励んでいます。

菊川さんの両親は樺太から引揚げた開拓者で、長年、苦勞されながら酪農を営んできました。その広大な跡地を耕し、6万以上のチューリップの球根を秋毎に手作業で植え、土中で越冬させて春を待ちます。「チューリップまつり」は5月に2週間前後開催し、村の内外から3万人もの人がやってきます。地元マスコミは核燃云々には触れず、定着した春の風物詩として報道。来場者には核燃事業への不安をスタッフに漏らす人もいたり。原燃の職員の方も、「ミスを派手に報道されてこっちも大変なんだよ～」なんて愚痴ってましたっけ。

WWoofers や援農ボランティアの存在抜きにまつりは語れません。ほとんどが都会で育った農的暮らしを模索中の若者で、玄米菜食の慎ましくも豊かな食事、酢や重曹での洗いもの、肥汲みにも嬉々として取り組んでいきます。「友達や家族に『六ヶ所に行くって』と言うと、『ああ、もうあんたはあっちの人なのね』って顔をされる」。これは全員納得の大爆笑。気になってるけど相手を選ぶという話題は、やはり再処理工場、エネルギー、戦争のこと。若者たちは問題の背景や弱者にしわ寄せがいく仕組みに義憤を感じ、自分は何ができるんだろう、と話します。また、若者だけでまとまらず、地域のお年寄りの知恵を受け継ぎながら自治体を自然エネルギーにシフトしているという、長野の若い女性たちの話や、地元のローカル政治に関心をもって自治力を高めていくのが大事、と豊富な経験で語れる菊川さんの提言に深く頷くのでした。

聞くうちに彼らが問題に敏感なのは、学校や職場の組織の中での不条理や、そのなかで苦しんで

る大人を見てきたことにも関係しているように思えました。追い詰められたときいつでも来ていい、しかも自分で食べ物を作れる。こんな場所は絶対必要なんです。と言ったバイク青年に、私は「放射能が流されてても？」と意地悪な問いをしてしまいました。（続く／ココペリエ）

〈大間から〉

大間のマグロにとって原発はプラスになる？ そうきかれて「なる」と答える人はあまりいないと思う。そんなシンプルな想いを行動に示し続けてきたのが故・熊谷あさ子さんだ。

今年、建設予定地内にあさ子さんの土地を抱えたまま、原発が着工を開始した。その土地に建てられたログハウスには、あさ子さんの意志を引き継いだ娘の小笠原厚子さんが半ば居住している。

あさ子さんが表だって主張をしてこなかったためか、大間原発はあまり世間に知られていない。さらに最近原子力施設の立地が進む青森県では声を上げづらい状況になっている。厚子さんは、この問題をもっと日本中に知ってもらい、全国から声を上げて欲しいと言う。たくさんの人に来てもらい多くのことを伝えるために、近いうちにログハウスへ生活の拠点を移すそうだ。

ログハウスの電気は太陽光発電と風力発電で賄われ、水道も井戸水を風力発電で動くポンプで汲み上げている。給湯も太陽熱温水器だ。一方で大間原発は約800キロメートル離れた東京に電気を送る。電気の消費地から遠いこの大間からなぜわざわざ送らなければならないのか。

さいわい、「六ヶ所村ラブソディー」を観た人によってつくられたうねりは全国で続いている。大間にもわたしたちの声を届けよう！（O2）



写真：大間原発の建設予定地内にあるログハウス。あさ子さんはこの土地を守り続けてきた。

■ わかめの会・シュミの劇場

わかめの会のメンバーは本当に多士済々。意外なあの人が、実はこんなシュミを〜?!ということもしばしばです。このコーナーではそんな隠れたシュミについて赤裸々に語ってもらいます!

第 1 回 金魚飼育の巻

はじめまして。わかめの会で金魚をこよなく愛している JK ヒロセです。

金魚はとても癒されます。部屋にいただけでインテリアとして存在感があるし、餌やりや水換えで自分が頼られている信頼感も沸いてきます。なにより愛情を注ぐことで、自分自身、人間が優しくなれるんです!

ところで、お祭りの金魚すくいなどをきっかけに、家で飼いはじめたけど1週間もしないうちに、お星様になってしまった、という経験をした方は多いのではないですか?本来、金魚はとっても丈夫な魚なんです。正しい育て方を知っていれば、10年くらいお付き合いできるお友達です。

大切なのは、金魚の気持ちを知ること。金魚にとって居心地のよい水槽環境を作ってあげることなんです。

とくに、金魚を家に連れてきたときが一番大事。金魚にとって最も重要なのが水。私たち人間が空気を吸っていることが自然なように、金魚は水の中に生活しているのです。空気が汚れていれば、ぜんそくや花粉症などを発症してしまうように、金魚にとっても水が合っていることがとっても重要。

とくに、家に最初につれてきたときは、金魚すくいであおられていたり、ショップから運ばれてきて疲れたりしているので、休ませてあげることが必要なんです。

そこで、水道水を1日汲み置きしてカルキを抜いた水(お店で売っているカルキ抜きハイポな

どを使ってもよい。カルキを抜かないと塩素によって金魚のえらが痛んでしまうのです)を水槽に入れて、さらにこの水に塩を入れて0.5パーセントの塩水を作ります。この塩水は金魚の体液とほぼ同等の濃度なので、金魚にとってとても楽なんです。

しかし、いきなり金魚を水槽にドボンなんてしてはいけません。金魚を運んできた水と新しい水槽の水は水質が全然違います。なので、運んできた金魚の水に水槽の水を3分の1程度ずつ2~3回に分けてゆっくり混ぜて水質をあわせてあげるのです。このとき重要なのが温度!温度も同じに設定してあげないと、金魚がびっくりしてしまいます。温度と水質は、人間がサウナと水風呂を、何の心の準備もいきなり移動させられたくらい驚きモノ。

こうして、濃度、水質、温度をあわせてあげて、ようやく水槽に入ることができるのです。疲れた金魚の体を最もリラックスした状態で水槽に招いてあげることが、飼い主にとっての最初の愛情ですよ。

でも、愛情だけではないんですね。このあと1週間は絶対に餌をあげてはいけません。いや、餌をあげないことこそ愛情!その理由は次回に…。(JK ヒロセ)

※わかめの会には課外活動として金魚飼育部があります。

入部希望者は JK ヒロセさんまで。その他、山岳部やサーフィン部などがあり、楽しく活動してます。



■ 六ヶ所再処理工場の今 #1

2006年3月末にアクティブ試験を開始した六ヶ所再処理工場は、放射能を海や空に捨てながら、またトラブルを起こしながらも試験の最終第5ステップに突入している。現段階(08年9月)では、本格稼働は11月予定となっている。

しかし、最後にして最大の難関が待っていた。高レベル放射性廃棄物の処理方法としてのガラス固化がどうしてもできないことだ。いわゆる「白金族問題」である。つまり、炉の底に希少金属がたまってガラスの粘性が増す不具合で、昨年12月から中断。原燃が総力をあげて改善に努め、やっと今年7月2日に再開したのだが、1つも固化体をつくることもできず、またすぐさま停止するという大失態を演じた(原燃はこれをトラブルの「A情報」として発表している)。しかしこれは、原燃に試験再開OKを出した国(保安院)にも大いに責任がある(いいかげんですよ)。

また、断続的になされていた使用済核燃料のせん断は、7月29日から扉の開閉不良のため止まっていたが、9月15日からせん断が再開された。つまり、ガラス固化されない高レベル放射能廃液がどんどんつくられる状況にある(おそらく現在は220m³くらい?)。これが地震とか事故で万が一外にもれたら、そのすさまじい放射能によってあたり一面人が住めなくなってしまうことが今最も危惧されている(チェルノブイリだけでなく、ウラルの核惨事にも注目! フランスでも大惨事一歩手前だった)。

六ヶ所のガラス溶解炉は、フランスのそれとは構造がまったく異なり、東海村の国産技術(1H1)を継承して巨大化(なんと4800kgくらい! フランスのは200kgほど)するとともに寿命を長くして経費を節減しようとしたらしいが、それがあだになってしまった。どうもこれではマズイと思ったのか、最近「新しい炉を」という声もあるようだが、その製造にはさらに数年はかかる。そもそもガラス固化体は、これを地層処分して

何千何万年と管理しようとするNUMOが処分場をあの手この手で探し回ってる当のブツである。その製造自体がうまくいかなければ、処分場自体もいらないのでは? そしてNUMOの優秀な職員は、自然エネルギーの開発・研究にあたってもらったほうが、よっぽどみんなのためになる。「エネルギーのリサイクル」の名で無理に無理を重ねることが、逆にエネルギーのムダ(人の力も、お金も)を生み出していると思うのは私だけ?(たてのむ)

編集後記

「わかめの会報を作るべ!」と叫んで、book cafe 火星の庭でたてのむ、ココペリエ両氏と最初の打合せをやってから早2ヶ月。創刊号が出るのがここまで遅くなりすみませぬ~。あの時はおれもまだ若かった(遠い目)。わかめ汁、魁! わかめ塾、世界の中心でわかめを叫ぶ等々、数十あまりもタイトル案を考えたものでした。汁とsoupじゃえらい違いっすね。(偏執長 ふだ)

三陸・宮城の海を放射能から守る仙台の会とは

通称わかめの会。六ヶ所村再処理工場から排出される放射性廃液から三陸・宮城の海を守るため、2006年6月に結成されました。放射能汚染を防ぐため、講演会の開催や、政治・行政への働きかけ等さまざまな活動を行っています。サポーター募集中! 詳しくはホームページで。

● 連絡先

980-0811 仙台市青葉区一番町4-1-3
仙台市民活動サポートセンター LC No.6
Fax 022-268-4042 (わかめの会宛)
E-mail wakamesanriku@yahoo.co.jp
URL <http://lmswkm.net>

● 寄付はこちらへお願いします!

郵便振替 02250-6-45865
加入者: わかめの会

わかめ soup Vol.1

発行 三陸・宮城の海を放射能から守る仙台の会
編集部 ふだ、たてのむ
発行日 2008年10月26日